

モーツァルト 魔法の音楽

文=佐藤美晴 演出家

未曾有の地震が東日本を襲った。自然の猛威の前に、我々は人間の無力さに呆然となり、大きな絶望感を味わった。人々の嘆きの声が聞こえ、あちこちで争いが起こっている。そんな中で、人々の繋がりや輪も生まれている。私たちは今、新しい時代に突入している。

地震の時、私は箱根にいた。ちょうど5月に荒川で上演する予定の「魔笛」の演出プランを美術・衣装・小道具スタッフたちと固めているところだった。みんな「魔笛」に集中して取り組むために、日常の都会生活から抜け出して山の温泉地に籠るといふ、念願の打ち合わせ旅行をしていたのだ。

モーツァルトのオペラ「魔笛」は、今年で上演220年目を迎える。1791年の初演以来、現在でも世界中で最も人気なオペラ。このドイツメルヘンオペラの傑作は、神秘的な作品でもあるゆえに、様々な解釈の可能性がある。

試練の場面の火や水はどう描こう？ザラストロや女王の世界の破滅的な状況は、何で表そうか？そんな打ち合わせの最中、突然私たちスタッフは地震に遭った。その後、恐ろしい津波の猛威と気仙沼の大火災を生放送で見た。さつきまで話していた想像上の水や火の試練ではなく、悪夢のような現実の津波と大火の脅威がそこにはあり、しばらくの間私たちは言葉を失った。こんな時にオペラを作っているといいのだろうか？

しかし、このような時だからこそ、「魔笛」の上演には意義がある、と敢えて言

わせてほしい。クライマックスの火の試練と水の試練では、自然の夜の暗闇に脅かされ、苦しみと死に嘆いていた世界の「死と再生」が描かれている。恐怖と苦悩を経験したタミーノとパミーナは、魔法の笛を吹きながら、喜びと希望を持って「死の暗い夜」の中を歩き、二人の愛の強さは世界を再生させてゆく。

今、日本中がひどく傷ついている。今こそ、魔法の笛を響かせる勇気が必要だ。モーツァルトの音楽は教えてくれる。どんなに「死の暗い夜」の中で辛い状況にいても、絶望を経験しても、幸せを感じて歩むのだよ、それが魔法なのだよ、と。220年の長い歴史を経て、「魔笛」の音楽は、こうやっていつの時代も人々の心を温め、励ましてきた。私たちが深い悲しみに打ち勝ち、希望を持って、タミーノやパミーナのように高らかに魔法の笛を鳴らして歩いていく勇氣を持つとうではないか。

9月には「神々の黄昏」の上演がある。この物語でも、「火と水」は非常に重要なモチーフとなっているが、「魔笛」と「ニーベルングの指環」には、他にも共通する要素が見られる。例えば、タミーノもジークフリートも、ドイツメルヘンの規範に倣い、森の中に入り込んでいつの間にか通過儀礼に参加している。タミーノは樹齢千年の魔法の樹から切り出された魔法の笛を、ジークフリートは世界樹から抜かれた剣ノットウングという、それぞれ太古の自然の魔力を秘めた品を持っている。ザラストロが持っている太陽の環とニーベルングの指環は、いずれも、世界の権力を掌握できる黄金の環だ。その環を虎視眈々と狙っている地底

の国の住人、夜の女王やアルペリヒは、それぞれ自分の子供、パミーナとハーゲンに最後の望みを託している。「魔笛」「神々の黄昏」、どちらもドイツオペラの大傑作、これらを連続して作っていくことはこの上ない喜びである。

今回の地震で犠牲になられた方々とそのご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。被災地の一日も早い復興をお祈りしています。

被害に遭われた方々が少しずつこころ安らげる日を得られますように。現在、5月の本番に向けて、出演者一同が荒川で「魔笛」の稽古に励んでいる。



パミーナ/童子/パパゲーノ (衣装スケッチ: 小山人花繪)

■さとう・みはる



オペラ演出家。慶應義塾大学大学院修了(美学美術史学)。オペラ演出史研究、ウィーン大学演劇学科にて一年間留学。これまでに「フィガロの結婚」「ナクソスのアリアドネ」「リゴレット」などを演出。2011年は東京国際芸術協会主催公演「魔笛」(5月)「神々の黄昏」(9月)や、コンサートオペラ「魔笛」(10月、神奈川芸術劇場)を演出予定。

■公演情報

- モーツァルト「魔笛」
5月28日、29日 サンパール荒川
- ワーグナー「神々の黄昏」
9月23日～25日 サンパール荒川
- 問：東京国際芸術協会 TEL03-3809-9712
http://www.tiaa-jp.com/tiaa_opera/